

コロナ禍の中の活動を振り返る

①Zoom 会議でつながりました。

昨年2月29日は3つの就労支援の事業所スタッフが集まり、「面談の基本」について研修する予定でしたが、コロナ禍で中止。「面談」は会話だけでなく相談者のしぐさ等も重要なので、結局は今年分散開催となり、3つの事業所のスタッフが顔合わせをすることはできていません。この1年で協会の会議や研修の在り方がかなり変わってきました。

昨年5月の総会以降 zoom によるオンラインの活用を始めました。遠方に住んでいても参加が可能。体調が多少悪くても参加できる。事業が膨らみ会議が多くなっていますが、zoom とリアルを組み合わせると短時間に開催することも可能になりました。反町カフェぼらんの居場所チーム会議はコミュニティ食堂の前の1時間で、コミュニティ食堂に参加するメンバーはリアル、それ以外は zoom 参加で開催しています。混合開催のためにスピーカーマイクも購入しました。

スタッフは業務があるため、なかなか外部のフォーラムや学習会に参加できませんでしたが、会議の時間の一部を研修の場として、生活困窮者自立支援者交流研究大会やその他のフォーラムの活用を始めました。協会が参加している社会的企業研究会もかえってコロナ禍で活気づいて月に2~3回も研究会が行われているし、東京のワーカーズ・コレクティブ研究会やNPO学会などの学習会などに理事も参加する機会が増えました。リアルなら参加できない人がオンラインなら参加できるということも見えてきました。

次年度はオンラインの利点をはっきりと意識して研修・会議等に積極的に活用したいと思います。一方で直接人に会うことの大切さも実感していますし、オンラインを活用できない人たちもいるので、直接会場とオンラインを活用する場と分けて、活動をすすめます。横浜の事務所、はたらっく・ざま、はたらっく・ゆがわら、反町カフェぼらん、そしてはたらっく・ひらつかと5か所になった事業所を来年度はオンラインでつなげていきたいと考えています。(松川由実)



②「はたらっく・ざま」は元気です！

<「はたらっく・ざま」のコロナ対策>

「はたらっく・ざま」では、緊急事態宣言の発出をうけ、対策として下記内容を取り決めました。

①お休みしない

利用者が困りごとの相談ができるように、変わらず事業を続ける。

②感染予防策の徹底化をはかる

仕切り版の設置、体温測定、手指の消毒、室内の換気、清掃をまめに行う。密を避けるために集まれる人数はスタッフを加えて最大10人までとする。各講座は個別対応とする。

③予防にむけた研修を8月と12月に実施、対応策を書面で利用者全員に配布。

<就労する人、利用する人が増えました>

コロナ禍で仕事を失う人達が増えている中でしたが、5月、6月に就労する人が出てきました。自分の力で就活をして就職先を見つけることができたのは大きな自信に繋がりました。さらに休まず事業を実施していたことで、利用者も毎月出ています。アウトリーチ支援により「はたらっく・ざま」の利用を始めた方も増え、現在まで新規で18人、継続では47人になりました。そのうち就労者は7人になりました。(2021年1月末現在)

<新プログラムの取り組み>

今年あらたに「居場所サロン」と「社会参加ボランティア活動」のプログラムを開始しました。居場所サロンは、利用者が多世代に広がったこともあり、自由に参加できる場を増やし交流の機会を増やすことが目的です。それは「心を豊かにする時間」であり「学びの場」でもあり、「ほっとする場」です。今年「メンタルの自己管理方法を学ぶ」研修、「ハローワークのお話し」「就労準備講座」「クリスマス会」を開催しました。社会参加ボランティア活動は、座間市にある社会福祉法人との連携で、座間駅から近い合祀墓の清掃活動が始まりました。昨年の9月より毎月2回の清掃に3人の利用者が参加しています。定期的に同じ仲間と同じ作業を行うことで緊張もほぐれ安心してきたのか、休むことなく通っています。

<ボランティアによるサポーターの組織化>

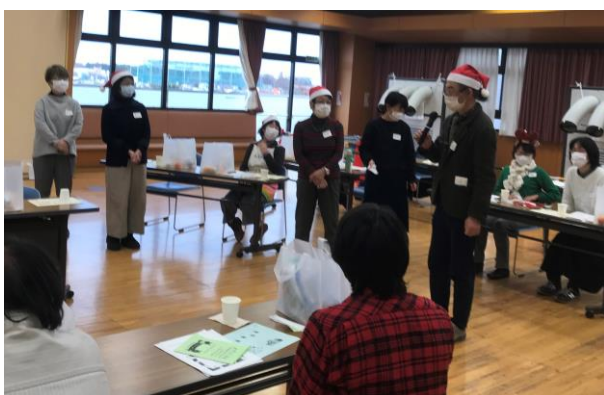
居場所サロンの実施にむけてボランティアスタッフとしてサポーターを設けました。昨年の春に実施した「サポーター養成セミナー」の参加者から6人がサポーターになってくれました。全員生活クラブの組合員とその家族です。経験豊かでこの活動に理解を示してくださった方たちです。定期的なサポーターミーティングを開催し、居場所サロンの運営に関わってもらっています。

<修了式とクリスマス会>

昨年の12月に恒例になった修了式とクリスマス会を、座間市サニープレイス大会議室で開催しました。150人定員の会場に40数名が集合、すでに就労した利用者も参加して、プチ同窓会にもなりました。働き始めた利用者を応援する修了式では、協力事業所としてデポット相武台ランチ代表や（社福）足跡の会、座間市生活援護課から数名の出席をいただき、お祝いのメッセージをもらいました。さらにボランティアサポーターから手づくりのエコバックのプレゼントがあり、大勢の人たちから祝福を受けました。修了生は緊張しながらも誇らしげな姿が印象的でした。クリスマス会では飲食を中止にして食べ物は持ち帰りとしましたが、ここでもさがみ生活クラブの理事やサポーターが活躍、恒例のご当地クイズやビンゴゲームで盛り上がり、賑やかな時間を過ごしました。参加者からは「コロナ禍であまり人と会えない時に、この会を開いてくれてうれしい」「この会はたくさんの方たちからの応援があるのがわかりました」などの声がありました。人との出会いとつながりの大切さをわかってもらえたクリスマス会でした。

2021年度も「はたらっく・ざま」が困窮者支援を通して地域の人たちのつながりに寄与するように真摯に活動を続けていく所存です。

(おかだ ゆりこ)



「はたらっく・ざま」昨年のクリスマス会です

③はたらっく・ゆがわらの1年

足柄下郡の就労準備支援事業を受託した「はたらっく・ゆがわら」の活動も2年目を迎えて、活動が軌道に乗り始める矢先の緊急事態宣言の発出となり、感染予防対策を徹底しての活動に工夫を強いられました。緊急事態宣言発令中は県の方針によって、事務所内の収容定員は10人に制限され、飲食を伴う活動ができなくなりました。特に高齢の利用者が定期的に来て楽しめる場面として月2回の居場所サロンを開催していますが、1回目の宣言発令中は会食はなしで、利用者に個別に来てもらい、エコバックのポイント染めやエコぞうりづくりをしてもらいました。6月に飛沫防止の亚克力板がそろったので、2回目の緊急事態宣言

中は、座席を移動せずにできるように工夫して駄菓子づくりや張り子のひな人形づくりを少人数で行いました。

利用者の生活状況などを理解するために行っている、生活訓練講座のプログラムの一つである食事作りも2回目の宣言中は、感染予防をしながら開催する方法を考えて、テーブルに材料や調理器具をすべてそろえて、ガスコンロで簡単な炒め物などをつくってもらい、ご飯と一緒に紙のお弁当パックにつめて持ち帰ってもらうということもやってみました。定期プログラムを中止することなく、縮小しながらも開催し続けたことは、コロナ禍においても事務所はいつも通り開いている、という安心感を利用者さんに与えたと思います。また、来所が少なくなった利用者さんには電話でコンタクトをとり、孤立することがないように配慮しました。

居宅生活移行総合支援事業では、湯河原でのアパート探しや引っ越し支援、その後、安定して生活を営めるように見守りを含めた定着支援を行いました。

去年の10月末から、湯河原、真鶴の中学生への学習支援の会場として提供しています。コロナ禍で二宮で行われていた学習支援事業の場に受け入れてもらえなくなった生徒に地元で学習機会を提供するための取り組みです。ぜひ生活支援となるような協力も行いたいと考えて、毎回お楽しみの軽食（ホットケーキやお汁粉など）を提供しました。中学生は毎回の軽食を楽しみにしてくれていましたが、残念ながら2、3月の軽食は中止せざるを得ませんでした。それでも中学生たちは毎回休まず参加して、受験生2人は高校受験に合格しました。始めた当初は問題を理解することも難しかった中1生も、2月の学年末テストでは、得点をもらうことができ自信を深めています。子どもたちに力がつくのを目の当たりにすると、学習支援の大切さが実感されます。今後、学習支援を広げる取り組みを行っていく予定です。

コロナのあるなしに関わらず、利用者さんに寄り添いながら各人に合わせたプログラムを工夫していますが、今後は生活困窮の利用者が増えることが見込まれ、今まで以上に個別にあわせたオーダーメイドの支援が重要になると考えています。

(柏木 晶子)

④フードバンクの活動とその役割

フードバンクかながわ 土山雄司

神奈川県内でも大量に捨てられてしまう食品があるなか、日々食べるものにも事欠き生活に苦しんでいる人がいます。当法人の活動目標は、食品ロスの「もったいない」と生活困窮者支援としての「ありがとう」の間に「分かち合い」という言葉を入れて表しています。県民が貧困とか格差を身近に感じ、悲しみや苦しみを分かちあい、共に手を差しのべ助け支えあいのある地域社会を目指しています。

今年度は、コロナ禍で当法人の企業・団体や個人からの食品寄贈、各団体への提供も前年度の2倍ペースで進んでいます。21年1月までの入庫重量は、163.9トン（前年比222%）、提供重量は156.8トン（230%）となっています。コロナウィルスの影響による営業自粛に伴い、飛行機が飛ばなくなったデルタ航空より2.4tの機内食。鎌倉紅谷からは、デパート等の店舗の休業に伴って菓子10.5t、全農からは、給食が止まり余った牛乳をLLにした1.6kgの牛乳パック。コカ・コーラより学生支援、生活困窮者支援として飲料14tの寄贈がありました。生協関係では、ユーコープより毎月1t近くの食品寄贈、米の緊急支援として生活クラブ連合会より米7t、パルシステムより6tの寄贈がありました。また個人からの食品寄贈（フードドライブ）も増えています。個人での持ち込みや宅配、イトーヨーカ堂18店舗やユーコープ店舗、生活クラブ・パルシステムの配送でのフードドライブの実施。藤沢市・横浜市でのフードドライブの開催。労働組合関係団体は、当法人の米備蓄の逼迫に伴い緊急支援として米1合寄贈運動を展開し、フードドライブで27t（前年比207.5%）の寄贈がありました。食品の提供もコロナウィルスの影響による雇用不安や学校の休校に伴って、行政・社協、地域フードバンク、子ども食堂への食品提供が増大しています。

子ども食堂は、行政の施設が使えなくなり食事の提供からお弁当の配食や食品の提供（フードパントリー）に切り替え提供量が増えました。



学生支援については、地方学生は帰省もできず親からの仕送りもままならず、バイト先もなくなり、大学へは行けない状況でした。横須賀市が学生支援として食品提供を始めました。県立福祉大学と歯科大学の学生に大学を通して全学生へ食支援の案内を送り学生と横須賀市の生活支援部局を結びつける活動を行いました。相模原市・横浜市社協・川崎市社協等が学生支援を行ない延べ7千人以上の学生支援を行ないました。鎌倉紅谷からは、生活困窮者支援だけではなく支援団体のスタッフやボランティアを含めて幅広く食品を提供して下さいとの要望がありました。そこで、コロナウィルス対策に奮闘している、フードバンクかながわの各会員関連病院にも提供を行ないました。コロナウィルス関連としては、低病状者の隔離施設である湘南国際村へ食品提供を行なっています。雇止めや収入の減少に伴い各行政・社協への食支援も急増しており、特に12月は、年の瀬と相まって住宅確保給付金の支給が限度に近づいた事（12月8日再延長が決まりましたが）、社協の小口資金の返済が始まる事で各行政・社協が一斉に食支援に重点を置きました。一人親支援としては、横浜市は横浜市母子寡婦福祉会への委託により食支援として毎週240人分の食品提供、各行政や社協でも一人親支援に向けて食品提供が増えています。結果、提供量が増大し月によっては寄贈量よりも提供量が上回り、米や主食・副食が逼迫し綱渡りの状況が続いています。が、この難局を乗り越える為にも、出来る限り食支援を通して地域社会の中で人と人との関係性を繋げていきたいと考えます。

」

***今回最もコロナの影響を受けた協会の実習先として寄稿をお願いしました。**



⑤反町カフェぼらんの1年

突然、1ヶ月ほどの休業を余儀なくされ新年度が始まり、どの業界も厳しい環境が続く1年でしたが、ワクチンの接種が間もなく始まるニュースも聞こえてきます。収束に向かって明るい光が見えてくるのでしょうか。このような状況の中ですがぼらんはランチタイムを中心に営業を続けてきました。入り口では、検温、手指の消毒、三密にならないようテーブル席は間隔をあけ、アクリル板を設けて飛沫対策をしています。私たちスタッフもマスクと手指の消毒は欠かさず、入り口やトイレのドア、厨房機器へのこまめな消毒を心がけ感染予防に徹しています。おひとりでお越しくださるお客様も多いので居場所としてコミュニケーションをとりながらのランチ提供を望んでいますが、今は言葉少なく静かに食べていただいています。ただ雰囲気は明るく和やかさを忘れないように心がけています。日替わりランチメニューも好評です。楽しみに来て下さる常連さんの「おいしかった」

「こんなに色々食べられてうれしい」
の言葉を聞くともっと頑張ろうと心も弾みメニュー立てにも力が入ります。



スタッフの提案で始まった親元を離れて暮らしてる学生さんの応援弁当の取り組みも大変好評でした。特に男子学生さんで自炊も慣れない1年生は、コンビニを頼りにしていた様で、「沢山の野菜は今まで食べた事がない、嫌いで食べなかった野菜もぼらんで食べて食べられるようになったので実家に帰った時にお母さんに作ってもらった。」などうれしい声も聞かれ、「お婆さんは木でも山でも登りますよ。」という気持ちになってしまいました。お店に足を運んで下さる方はもちろんですが、高齢の方や食事が必要な方への配達などさらに進める方向ですが、ぼらんがここにあるということをもっと地域にアピールすることを続けていきます。クリスマスランチだけでなく四季折々のイベントメニューに取組み、楽しんでいただけるランチも考えています。多くの方に来て楽しんでいただけるカフェになるよう一歩一歩進んでいきたいと思ひます。皆様 どうぞ来店くださいませ。（林 奈保子）